

発達障害のある児童の理解と具体的支援・指導方法に関する考察

山下 浩

1. はじめに

発達障害のある児童との関わりは、狭山台北小学校に転任し、発達障害・情緒障害通級指導教室を立ち上げたところから始まる。7年間、個別指導や小集団指導を通して学んだこと、具体的に支援したこと等を中心に書いていく。発達障害のある児童は授業中、休み時間を問わず様々な行動をとり、授業参加が難しかったり、行動上の課題をたくさん持っていたりする。しかし、共通して言えることは、みんなできるようにになりたい、よい子でいたい、褒められる子になりたいと思っている。周りから見れば、手がかかり本当に困った子だと思われやすいが、様々な状況の中で追い込まれてしまっている場合がほとんどで、本当に困っているのは本人自身だという理解が大切になる。発達障害のある児童が生得的に持っている難しさを改善するには多くの時間が必要になるので、個々の児童の難しさに応じた支援を適切に行っていくことが大切になる。

2. 良い関係を築くために

(1) まず気づくことから始まる

連絡してもすぐ聞き返す。質問されると「わからない」「めんどくさい」と言うことが多い。文章問題が苦手。平仮名、片仮名、漢字や英語がなかなか覚えられない、書けない。いつまでも指を使って計算する。掛け算九九がなかなか覚えられない。文の読み取りが難しいなど LD の特徴がある児童がいること。指示や説明を聞いていないことが多い。次々いろいろなことを始める。よく動く。離席する。よくしゃべる。なんでも早くやりたい。ぼーっとしている。感情的になりやすい。すぐに手や足が出るなど ADHD の特徴がある児童がいること。一人でいることが多い。協力して活動することが苦手。周りの人が気にすることを言ってしまう。いつも誰かを注意している。特定のことを知り過ぎていて〇〇博士。何回説明されても納得できずに質問を繰り返す。いろいろなことにあまり反応しないなど ASD の特徴がある児童がいること。LD、ADHD、ASD の特徴が重なり合っている児童も少なくない。本人の難しさに気づくことが大切になる。

(2) 行動の意味を考えよう

様々な状態像を示す子どもたちに出会ったときに、理解しようという気持ち、応援するよという気持ちで接することが一番大切になる。授業中や生活の中で不適切と思われる行動を取っている児童に対して、注意したり、叱ったりする前に、行動の理由や意味を本人に聞いてみるのが大切で、本人がうまく表現できない場合は、考えられる理由や意味を代弁して確認することも大切になる。叩く、寝ころぶ、やる気のなさ、悪態も表現の難しさ、言語化することの難しさと考えて、一つの意思表示の手段なんだと思うと指導する側にゆとりが生まれることになる。また、人の嫌がることを言ったり、指示に従えなかったりすることは悪意ではないことも理解する必要がある。

(3) この先生は分かってくれる、面白いぞ、言うことを聞いていれば大丈夫

子どもたちの評価は鋭く、指導者や担任に対する初めの評価が固定的になりやすいので、でき

るだけ好印象を持ってもらうことが大切になる。そのためには、禁止、命令の形での指示はできるだけしない方がお互いのため、期待される行動を肯定的に分かりやすく指示するとうまくいくことが多い。指示した通りに行動できたら直ぐに褒めることが大切になる。子どもたちの行動に対して支援するとき「こういう思いなのかな?」「こうすればうまくいくかな?」など指導者や担任が楽しんで接するとお互いが楽になるのではないかと思う。時には気になる行動に目をつぶって授業を進めることも必要な場合がある。適切な行動が取れているときに言葉掛けやアイコンタクト等でその行動を認め、興奮したり、離席したりしそうなときはそっとそばに行って、頑張っている状態を褒めることが適切な行動を引き出す支援になる。

3. 支援をするときに考えたいこと

(1) 適切な目標設定、課題設定をする

目標設定、課題設定に当たっては、様々な情報を総合して考えることが必要になる。保護者からの情報として、出生時の状態や発達の様子、診断、服薬等に関わる生育歴アンケート、本人の食生活や行動面の嗜好、1日の生活リズムや日常生活動作の状態、家族や地域での関わり等についての生活実態調査、本人と保護者の意向を反映するための課題作りアンケート、就学支援委員会からの情報、医療機関からの情報、就学前の保育園、幼稚園の情報等を活用して個別の指導計画を立案して指導に当たる。通常の学級の中で、みんなと同じ課題で学習するなら、単元や1時間の授業の見通しを分かりやすく提示し、プリント等の課題や板書量の配慮等の支援があるとうまくいくことが多い。理解している友達の援助、補助教材・教具の活用等の支援も効果的になる。授業参加が内容的に難しくなってしまった場合は、本人にあった課題で学習することもある。

1時間の見通しを提示し、授業参加が出来るところ、難しいところを理解して、課題の量、種類、順序の選択等を話し合った上で進めるとうまくいくことが多い。目標、課題、支援、指導方法は本人の状態や特性に合っているかを2ヶ月を目安に振り返り、複数で話し合い、指導に関するアンケート(保護者)等も活用して修正していくことが大切になる。

(2) 環境を整える

座席については、個々の児童の特性にもよるが、一番前よりは前から2番目の方が担任の視界に入っていることが多く、支援が入りやすい傾向が見られた。また、本人のことを理解している友達の隣は落ち着いて学習できることが多かった。一般的ではないが、授業内容によっては窓際や廊下側で授業以外の情報が入りやすい所の方が、気分転換がしやすく、授業参加も多くなることもあった。他の友達の行動が気になる児童の場合は、一番後ろの列の真ん中が、クラス全体を見渡すことが出来るので、落ち着いて授業に参加出来る場合もあった。教室に在ることを最優先した場合には、離席用の机と椅子や段ボール製のシェルターも効果的だった。机の上に色々な物が乗ってしまっている児童の場合は、前の時間の終了時に次の時間の用意をしてから授業を終わると授業開始時に遅れることなく授業に入っていけるので効果的だった。教室掲示は黒板の周り出来るだけ最小限の掲示にし、授業の展開や最小限の約束だけにすると注意が逸れることが少なくなった。机や椅子が動く音、がやがやした雑談の声、カーテンの隙間から入る太陽の光等苦手な刺激はできるだけ少なくすると集中しやすくなる様子が見られた。

(3) 自信が持てる場面を沢山用意して、成就感、成功感を体験する

発達障害のある児童は就学前から失敗やつまづきが多く、不安になったり、自信が持てなかったりすることが多い。本人の好きな活動や得意な活動を生かして、できたことをみんなで確認し合い、認め合えるようなクラスの雰囲気や学級経営の中で作ることが大切になる。そうすることで、クラスを自分の居場所と感じ、応援し合えるクラスという安心感を持って生活できるようになる。色々な難しさがある中で、援助を受けてもやればできる自分の発見を何回でも経験すること、苦しくてもがんばってできたという経験を積み重ねることが大切で、難しくても取り組む意欲に繋がり、「できない」「やらない」ということの克服にも繋がるが多かった。褒められることや担任との関わりを多くするねらいで、1枚のプリントの問題数を少なくして、何回も〇を貰えるようにするとうまくいくが多かった。

(4) 自分で考えて一人で出来ることを多くする

セルフコントロールする力を高めるためにも、様々な課題や期待されている行動に対して、何をどうやるのか理解して自分で判断して取り組むことが大切で、うまくいくための方法を支援されても自信に繋がることが多かった。色々なことに対して自分なりの方法を持っていることがよくあり、認められることであれば、自分の決めたことでみんなが良い思いをする経験を多くすると自己有用感も高まり、承認欲求も満たされるので良い方向に向かうことが多かった。手順ややり方が分からないときに、自分の難しさを受け入れて、友達や担任に相談すること、質問すること、困ったときに援助を求められることができるようになるとうまくいくが多かった。

4. ASDのある児童の授業等の学校生活で課題となる難しさや具体的支援

(1) 人間関係の難しさがある

①担任や友達が自分のことをどう思うか理解するのが難しいので、自己主張を強く繰り返したり、自分の正当性を主張しすぎたりすることがあった。また、相手の気にすることを言うてしまうことがあったりした。

- ・そのときの会話ややりとりの状況を関係した友達と一緒に、ホワイトボード等に記録しながら振り返る活動をし、本人の思いを受容しながら、そのときの状況にあった適切な行動を考えた。いくつか上がってきた適切な行動の中から、次に同じような場面があったらどの行動なら出来そうかを本人が選択するようにして意志表示し、周りの友達や担任はその行動が出来ることを期待して応援することを伝えると適切な行動がだんだん取れるようになっていった。

- ・自分の思いを受容して貰うと落ち着くこともあり、複数の友達から応援されているという実感が持てると自分の考えを変えたり、適切な行動が取れるようになることも多かった。

②短期記憶に難しさがあり、自分のしたことや言ったことを忘れてしまうことが多かったの
で、友達とトラブルになることが多かった。

- ・先に自分が友達の悪口を言ったことや叩いたことを忘れてしまい、「俺は何もやってないのに俺ばかり怒る」などの不満を持ちやすいので、関係した友達や見ていた友達も含めて始めに具体的事実を確認していくと、冷静になった状態なら少しずつ自分のしたことを思い出せるようになっていった。

- ・連絡帳に記入しないと忘れ物が増えることなどを通して、自分が忘れやすい傾向があることを少しずつ理解して受け入れられるようになると、トラブルは少なくなっていった。

- ③ゲーム等で自分の考えたルールでやりたい傾向があり、友達と一緒にゲームを楽しむことが難しいことがあった。
- ・本人の考えたルールややり方はおもしろいこともあるので、他の友達の詳細が得られると一緒に楽しむことができた。また他の友達と順番でそれぞれのルールでゲームに取り組み、自分のルールとは異なったルールで取り組むことが出来るようになり、ゲームを楽しめるようになった。
 - ・ゲームの途中で自分が負けそうなときに、明らかに自分を有利にしたいためのルール変更は友達も含めて論理的に反対すると受け入れることが出来た。
- ④友達や担任への評価が固定しがちなので、本人の状況を理解して接し、話し合える関係を保つことが大切になる。
- ・担任の考え方や学級経営との関わりが大変強く、担任やクラスで受け入れられ、応援されていると本人が感じられる状況の中で、比較的良好な関係が保たれていると話し合いができた。
 - ・異なった考えを示しても受け入れたりすることができた。
 - ・本人が嫌がったり、取り組まなかったりしたこと、また、我慢して取り組んでいることなどについてどうして嫌なのか、どのくらい我慢できるのかなどについて話し合い、取り組み方を考えた。

(2) 言葉の理解や表現上の難しさがある

- ①ルールを杓子定規に理解したり、ことばの表面上の意味しか取れなかったりすることが多いので、それが原因となってトラブルになることがあった。
- ・電話を受けて「お母さんいますか？」と聞かれ、「います」と言って電話をきることがあった。言外の意味を理解することが難しいことがあるので、電話での話や会話の中で相手が全て言い終わったら自分の考えで動くこと、支援する側は、具体的にどうして欲しいのかを先に伝えること、直接的で分かりやすい表現で言葉掛けを行うこと等で適切な行動を促せるようになった。
 - ・通学班で並んで登校するときに、班長である本人は列から体半分以上はみ出る班員が許せなくて、後ろ向きで歩き、頻繁に注意して班員と良くトラブルになった。これは通学班指導の会議で「班長は班員の命を預かっている」との話を聞き、責任感を持って取り組んでいることの裏返しだったので、本人の気持ちを受け入れながら、実際に絵や図に描いてもらって説明を聞き、実際にはみ出してしまう距離や離れてしまう距離について許容範囲を具体的に説明した。また、班長と副班長の役割分担を説明し、危険がある場合は後ろの副班長が必要に応じて注意をすること、班長は前を向いて歩き、みんなを引率していくことが大切等の話をするとトラブルは少なくなった。
- ②給食の約束や 1 日の予定など当然理解していると思われることでも分からないことがあり、不適切な行動が出てしまうことがあった。
- ・給食のお代わりに約束や 1 日のスケジュールが前に掲示してあるのだが、説明されている内容の言葉の意味がはっきり分からなくて自分の判断でお代わりをしまったり、教室移動のときに持ち物を忘れてしまうことが多かった。約束やスケジュールについて本人に確認しながら、場面を捉えて事前に具体的に説明したり、持ち物等を具体的に指示したりして、友達の言葉掛けの支援もあるとうまくいくことが多かった。

③授業中の指示でも1回で理解することができず、ふと本人が気が付くと友達が何かやっているということが良くあった。

- ・言葉だけの指示や連絡は理解できないことが多かったので、要点を黒板に書きながら説明し、全体への指示や説明を本人と目を合わせながらしたり、個別に確認すると確実にできるようになった。

④自分なりの理解をしていることがあり、それを周りの人に伝える必要性も感じないし、うまく伝えることも難しいので、調整が必要になることが良くあった。

- ・バドミントンのやりとり課題で、本人の位置がネットの直ぐ前だったので、ちょっと下がってと言うと壁まで下がってしまうことがあった。曖昧な表現は理解が難しいので、具体的に1マス下がってと言うと適切な位置に下がれた。
- ・失敗することが大嫌いな児童に「学校では失敗してもいいんだよ」と言う、「じゃあ失敗すればいいんだね」と言うので、失敗してもうまくいく方法を練習することが大切だと分かりやすく具体的に説明すると理解して課題に取り組むことが出来た。肯定的な表現で説明したり、省略したりせずに話すことで誤解は少なくなる。
- ・ホワイトボードを運ぶ途中でうまく運べずに倒してしまった後、机やイスを蹴ったり、倒したりしているので、ホワイトボードが上手く運べなかったからイライラしたことを代弁するとすぐに落ち着くことができた。本人の思いを一度受け止めて代弁することで、自分で気持ちをコントロールする力が付いていく。また、行動で表すより言葉で表す方が伝わりやすいことも理解して言葉での意思表示が多くなっていった。

(3) 感覚的な過敏性がある

①皮膚感覚が敏感で、体に触られることを嫌がることが多い。

- ・運動会の組み体操の練習に参加が難しかった。本人に確認すると体を触られたり、ピラミッドの土台になったりすると我慢できないほど痛いと言うので、練習は見学し、代わりに入ってくれる先生の動きをよく見ていて覚えるようにした。運動会の予行と本番は本人が入ってしっかり出来た。
- ・プールの更衣室で友達と肌が触れると痛く感じてしまうこと、着替えの時のがやがや声が大きく聞こえてどうしても我慢できないことが分かったので、着替えを教官室で一人でするとプールに入って学習することが出来た。
- ・気に入ったTシャツがあり、帰宅すると直ぐに洗濯してアイロンを掛けて貰い、次の日に同じ物を着ていくことが続いていた。同じ服を着たがったりすることは皮膚に触れる感触が同じ方が安心できるからで、家庭で同じ服を数着用意して対応した。身体接触を通じた関わりの課題に取り組み、リラックスする中で少しずつ改善できた。

②大きな音や騒がしい音は苦手なところがある。クラスのざわざわした声や高い声あまり好きではなく、大勢で出す大きな声も一人で出す大きな声も苦手なところがある。

- ・教室を黙って出てしまうので、どうしても我慢ができなくなったときは、教室を出るときに、担任に伝えるように考えたが、ことばや合図で伝えるときと黙って出て行くときがあった。
- ・良く話を聞くと担任の先生の声が高くて苦手な音域のようだった。早口で言葉数が多く、とても気になってしまうということだったので、担任に配慮をお願いするとうまく対応して貰い、教室に安心していられるようになった。

(4) 拘りが強く自分の思い通りに行かないと激しく泣いたり、不適切な行動を取ったりする

①楽しみにいたプールが行事でつぶれることが納得できず、大泣きをして行事に参加できなかった。

・時間割や行事の変更は、理由も含めてできるだけ事前に知らせ、当日の朝も黒板等に予定を書いて説明しておくことと納得して変更に耐えることができた。

②自分の聞きたいことがあると授業中に勝手に質問し、納得できるまで質問を続ける。

・授業が進まなくなるので、質問が可能かどうか確認する方法にし、「先生質問よろしいですか？」と本人が聞いて可能なら答え、難しいときは「待ってください」で待たせる。時間を見て確実に答えるようにするとうまくコントロールできた。

③1番でないと我慢できない。自分が許せない。負けるのが嫌。

・ジャンケンと同じグーなのに勝ったり負けたりするのが不安で、負けるかもしれないからやらないと言うことがあった。くじ引きやあみだくじにすると順番を決めることができた。

・1番になるときもあり、そうでないときもある。勝つときもあり負けるときもある。負けた人を慰める言い方、負けたときの言い方などをその都度みんなで言うことと切り替えられるようになった。負けたけど面白かったと言えるようになってうまく行くことが多くなった。

・簡単に勝負が決まるゲームや偶然性で勝負が決まるゲームを何回も経験することで、負荷の少ない負けを受け入れることが出来るようになった。

(5) 一般的な判断に難しさがある

①休み時間から教室に帰るのが遅れて、クラスみんなは理科室に移動していたが、本人は、みんながどこに行ったか分からないので図書室でずっと本を読んでいた。

・隣の教室の先生に聞く、職員室に行って聞くなど具体的にどうすればよかったかなどを一緒に考えて、次から取り組むように勧めると、改善されていった。

②言葉の学習中、作文をしているときにどんな漢字を使うのか分からなくなり、先生なら知っているでしょうと怒る。

・どんな文を書きたいのかが分からず、どんな漢字を使いたいのかも分からないので、探しようもなかった。漢字辞典を見せ、漢字の数は多いので、読み方も文字も分からないと無理だと説明して、家に書いてあるということだったので、家で漢字を見て書くように伝えると落ち着いて学習が続けられた。

③見通しが持ちにくく混乱しやすい

・学習予定を黒板に言葉で書き、その時に使う課題を一緒に提示すると、取り組む課題が理解でき、学習の順番を本人が選択するようにすると安定して取り組めた。

④下校時に「〇〇先生、馬鹿野郎！」と笑顔で遠くから何回も手を振りながら叫ぶ。

・次の日に、理由を聞くと「聞こえるか試した」と言うので、それなら「〇〇先生、聞こえる？」と言う方がよいことを伝えるとその言い方が身に付いた。不適切な行動が見られたときは、間違っていて覚えていることが多いので、適切な行動を支援するとうまくいくことが多い。

(5) 自分の持っている難しさに気づきつつある。

①自分の知らないうちに手が動いたりすることがあり、それを我慢することはとても疲れる。

・鉛筆や消しゴムを触る。ノートの余白に文字や絵を描く等の受け入れられやすい行動に変え

ることで、注意されることが少なくなり、授業内容が入りやすくなった。

- ②黒板の文字を読んでノートに書き写すのには大変な労力が必要で、1時間取り組んでいるとくたくたになってしまっていて授業内容の理解が難しいことがあった。
- ・必ず書くところ、できれば書くところ等の印を付けて書く量を調整した。自分の判断で板書を写すことができ、授業内容の理解も進んだ。
- ③自分は配慮されなくてはならない人間なのか、配慮されるのなんか嫌だ。
- ・個別指導や小集団指導の中で、自分や友達の持っている難しさの理解、受け入れ、うまくいく方法の提示等で変わっていった。支援も受け入れられるようになった。
- ④俺は病気だから良いんだよ。できなくてもしょうがないじゃないか・・・。
- ・難しさを認め、うまくいく方法を一緒に考えて、できることを少しずつ多くし、自信が持てる経験をたくさんすることが大切になる。
 - ・状況によっては本人が理解できるように話すことも必要になってくる。

5. ADHDのある児童の授業等の学校生活で課題となる難しさと具体的支援

(1) 自分の行動をコントロールするのが難しい（多動性、衝動性）

- ①授業中勝手に発言してしまう。
- ・学習の約束を忘れてしまう場合は、話して良い場面か、聞いている場面かが分かるカードを提示すると担任が指さすだけでコントロールが出来た。
 - ・発言したいときは「黙って手を挙げる」「指されたらハイ、発表、はい、～です」等の約束を改めて確認し、期待された行動が出来たときは必ず褒めるようにすると少しずつ身に付いていった。
 - ・xマークのマスクをしたウサギの絵のカードを提示すると口を結べた。今何をするときなのか具体的に支援するとうまくいくことが多い。
- ②「ちょっと待って」と言っても待つことができない。
- ・「50 数えて」「100 数えて」と具体的に指示すると待つことが出来た。
- ③椅子を後ろに倒して2本足で立ってふらふらして倒れることが良くあった。
- ・ゆらゆらしているときは比較的安定して話も聞けていたので、許容してもらい、倒れたときに友達がけがをしないように机の位置を動かして配慮をすると授業参加も多くなった。
 - ・話を聞いていないような姿勢でも、それが一番安定しているときもある。いつも体のどこかが動いている方が授業内容の理解も進んだのでディスクシットという道具を椅子の上に置いて着席するようにすると安定して授業が受けられた。
- ④自分の思い通りに行かないときに、友達を叩いたり蹴ったりしてしまうことが多い。
- ・我慢することはとても難しいので別の方法を考えて、自分の気持ちを言葉で表現する方向(ちくしょう、くそお、うるさい等)にすると気持ちを切り替えられた。
 - ・少しずつ小さい声にしていき、横を向いてことばで表現することから、頭の中で言うように練習すると安定してきた。
 - ・八つ当たりマット(体育のマットを丸めて)を活用する。家に帰ったらイライラクッションに顔を押しつけて大きな声を出す。違う部屋に移動して自分で落ち着く等が効果的だった。
 - ・教室にシェルターを作り、必要なときはみんな使って良いこと、使わずに済めばよりよいことの共通理解の上で利用を始めると、休み時間は友達との関わりの基地にもなり、安定して

授業を受けられることが多くなった。

(2) 注意の集中が難しく気が散りやすい (不注意)

①集中が続かなかったり、課題が難しかったりしてイライラすることが多い。

- ・「トイレ！」と言って教室を出ることが1時間に3回以上あったので担任に注意されていた。注意の集中時間が短いので自分で考えて行動していたのだが、そのことを担任に説明し、配慮をお願いすると「トイレや水飲み」を担任の先生に意思表示して許容してもらうことにした。初めは回数が多くなったが、担任や友達が理解してくれたことが分かり、だんだん回数は少なくなっていった。
- ・教室に自分用の机と椅子とは別に、気分転換やセルフコントロール用の机と椅子を置き、必要な場合は誰でも使って良いことにすると、二つを使い分けてうまくいくことが多かった。

②指示を1回で理解できず、気が付くと何をして良いか分からないことが多い。

- ・指示や連絡などは聞いていないことが多いので注目できるような言葉掛けをして、要点だけを黒板に書いて説明し、個別に確認するとうまく行動が出来るようになった。

③登校するとすぐに、ランドセルを机の上に置いたままで遊びに出てしまう。

- ・登校してからの一連の活動 (宿題・連絡帳を出す。ランドセルの中の物を机の中に入れる。ランドセルをロッカーに入れる。体育着に着替える。など) の絵カード (ことばつき) を前の黒板に貼って見通しが持てるようにすると確実にできるようになった。

④次々に自分の言いたいことを話してしまって友達の話が聞けないことが多い。

- ・約束を具体的な行動 (拍手、手を膝等) として提示し、小集団指導で得点制で取り組むと確実にできるようになり、在籍学級でも少しずつ変化が現れた。

⑤隣の友達が何を書いているのか気になって、話しかけたり、離席して確かめたりする。

- ・パーテーションを間に入れるとだんだん集中して取り組めるようになった。途中から段ボールの衝立にし、少しずつ上から切って低くしていくと隣の友達が見えてもだんだん自分の活動に取り組めることが多くなった。

6. LDのある児童の授業等の学校生活で課題となる難しさと具体的支援

(1) 聴覚的な情報の理解に難しさを持つ

①授業中ずっと泣いていたり、大きな声を出していたりする。

- ・個別学習の中で早口で指示するとまったく指示が理解できないことが分かったので、分からないときは「分からない」と意思表示することを練習し、本人が意思表示したらすぐに対応すること、授業中の指示をゆっくり話し、具体物や絵、文字を併用することの配慮をしてもらうと安定して取り組むことが出来た。

②順番に並べず1番前に来てしまうので友達に注意され、トラブルになることが多かった。

- ・並ぶ順番を「背の順」や「名前順」のように具体的に指示すると並び方の意味が分かり、トラブルが無く並ぶことが出来た。

(2) 視覚的な情報の理解に難しさがある

①忘れ物が多く、机の中も教科書やノート等の整理ができない。

- ・国語、算数について専用の袋を用意して中に入れる物を袋に書いておき、持ち物を自分で

用意するようにすると保護者とのめ事も少なくなり、忘れ物も減って登校が余裕を持って出来るようになった。毎週金曜日は引き出し整理の日としてクラスで取り組むと机の引き出しも整理されてきた。

- ②学校から帰るといつも玄関にランドセルを置きっぱなしにしてしまう。
- ・ランドセルを置くところをロッカーの上に決め、ランドセルが入る箱を用意して「ランドセル」と表示すると自分でしっかり入れられるようになった。連絡帳、箸箱セットも同様な取り組みで自分で出すことが出来るようになった。
- ③部屋の片づけで、何でも箱を用意すると、とりあえず箱の中に入れることで、持ち物がちらかることは防げたが、しばらくするとやらなくなってしまった。
- ・支援を受けてできるようになったときに、より良い方法を一緒に考えて取り組み、使いやすくしていく方法で援助するとステップアップしていくことが出来た。

(3) 算数の学習に難しさがある

- ①大きな数が理解できず、繰り上がり、繰り下がりの意味も混乱していた。
- ・カードリングにクリップを10ずつまとめたり、くずしたりする学習を通して、10の束の意味が分かり、位取りや繰り上がり、繰り下がりの計算もできるようになった。
- ②算数の九九がなかなか覚えられない。
- ・九九の練習はとてもイライラして、不安定になるので、九九表を使って計算することになると、九九が覚えられないだけだったので、その他の計算の方法や意味は理解でき、学習が進んだ。唱えるだけでは覚えられない児童にとって九九表は効果的な支援となる。
- ③足し算から引き算への切り替えがうまくいかず、全く取り組まなかった。
- ・視覚的な強さを利用して、数図を手がかりにドットを隠して数の分解を1から10まで確実に出来るようにすると、引き算の意味を理解して計算できるようになった。
 - ・始めは、数図1枚ずつで取り組み、最後は1～10までの数図を一覧表にして筆箱に入れて活用するとうまく学習できた。
- ④いつまでも指を使って計算している。
- ・数式としては理解していたが、足し算や引き算の意味を合成教具、分解教具で具体的操作を通して学習するとドリル学習も効果的になり、指を使わずに計算できるようになった。
- ⑤筆算の手順がどうしても分からなくなってしまう。
- ・計算の手順のを言語化し、計算するときに小さな声で言いながら計算すると間違わずにできるようになった。
 - ・計算の手順が一目で分かるように、最初の1問だけ記号を使って筆算の中に手順を書き込んでおく順番を理解して正しく計算できた。
 - ・児童の特性によって二つの方法を使い分けるとうまくいくことが多い。
- ⑥割り算の筆算で、商を立てる位置や計算の順番が理解できない。
- ・指を2本使って割る数と割られる数を隠し、右手の指の上に商を立てるよう支援すると抵抗も少なく割り算に取り組み、かける順を矢印で示すと計算も正しくできるようになった。

(4) 国語の学習に難しさがある

- ①平仮名、片仮名がなかなか覚えられない。

- ・平仮名、片仮名の一覧表を5~6枚程度用意し、クラスの誰が使っても良いことにして取り組むと安心して書いて平仮名と片仮名の使い分けもでき、文も長く書けるようになった。
 - ・濁音、半濁音、拗音、拗長音の表も活用した。(一覧表はクラスに5~6枚用意して)
 - ・箱の中から指示された文字を手探りで取り出す学習を通して、触った形を表現する学習を続けると文字を思い出すのが速くなった。
- ②文を読んで内容を理解することが難しい。
- ・漢字にはふりがなを書き、単語ごとにスラッシュを入れて分かりやすくした。漢字の意味理解を支援し、音読が正しくできるようになることが必要になる。
 - ・文章を読んであげて、問題も読んであげると口頭でしっかり答えることができる児童もいる。
 - ・先に設問を読んでから本文を読むとうまくいくこともあった。
 - ・具体的事実の読みとりを確実に出来るようにすることが大切になる。
- ③カタカナの学習に抵抗がある。
- ・好きなポケモンやむしキング、妖怪ウォッチのカード等を使って取り組むと積極的に取り組み、カタカナ一覧表も積極的に使って書くことができた。
- ④文字がなかなか枠の中に入らない。
- ・低学年が使う大きなマスで十字リーダー入りのノートにすると書くことへの抵抗が少なくなり、積極的に書くようになった
 - ・同じマスのノートで、4マスくらい使って書くと大きく書け、他の友達との違いも表面的には分からないので、プライドも保たれて取り組みやすいこともあった。
 - ・大きなマスのプリントを用意し、クラスの中で使いたい人は誰でも使って良いことにすると安心して使うことができ、漢字練習にも取り組むことができた。
 - ・パソコンソフトで筆順を記憶して1回だけ丁寧に練習し、その後の文作りと合わせて取り組むと絵日記や作文の文中で漢字を使うようになった。
- ⑤書くことが難しい
- ・板書の量を少なくしたり、書くところを色チョークで囲んで限定したりすると、決められたところは書けるようになった。
 - ・黒板の文字は写すことが難しいが、隣の友達のノートを見れば写せる子もいる。隣の友達がノートに写すときに読み上げながら書いてくれるのも効果的だった。
 - ・文をつづるとき言葉で言えば書けるので、許容してもらおうと安心して書けるようになり、だんだん声が小さくなって最後には言わなくても書けるようになった。
 - ・とめ、はね、はらいなどはできていなくても全て許容してもらおうと書く意欲が出てきて作文にも取り組めるようになった。
 - ・パソコンを積極的に使って、なぞなぞ作りでたくさんの文を打つと、鉛筆で書く文字もだんだん読みやすくなった。

7. おわりに

発達障害のある児童が、自分の特性を理解して難しさを受け入れ、個々の児童の特性や難しさに応じた適切な支援や配慮が行なわれることで、本人が達成感や自己有用感を感じ、充実した学習や生活が出来るようになる。必要な児童には、学校、家庭、地域、療育機関、医療機関等が連携して支援していくことが大切になる。